

「海岸林再生プロジェクト」支援企業・団体情報交換会 2023

議事要旨

1月17日（水）、UA ゼンセン会館にて「海岸林再生プロジェクト」支援企業・団体情報交換会を開催しました。ご参加くださったのは3企業・1団体（東京海上日動火災保険(株)、住友化学(株)、東京センチュリー(株)、UA ゼンセン）の6名と当プロジェクトに深く関わっていただいている森林・林業の専門家2名とスタッフ3名の会合となりました。東京以外の支援企業・団体の皆様のためにも、当日の内容を一部加筆してご報告します。

■参加者自己紹介

4企業・団体共に「海岸林再生プロジェクト」へのご支援だけではなく、法人会員としての関りが長く、また海外プロジェクトへの支援も継続してくださっていること、海岸林再生プロジェクトの現場に、今年度もボランティア参加いただいていることなどが参加者の皆さまから共有された。

■動画紹介

昨年の本数調整伐の様子を、Youtubeに公開されていない動画で紹介。

■プロジェクト責任者吉田より報告

【ボランティアの安全管理について】

今日の会合の趣旨として2点。まず、皆さんからのご支援のおかげで今も地元の雇用を維持し、プロジェクト全体が順調に継続できていることのお礼を申し上げたい。次に、コロナ禍を経て、企業・団体のご担当も交代されていることが多く、安易なボランティア派遣になることを危惧している。このプロジェクトはあくまでも「事業」であって、ボランティア受け入れのためのプロジェクトではありません。そして、何が何でも無事故を目指す気持ちをお伝えしたい。

皆さんの組織からもボランティア派遣をしていただいております、これまでに1万4千人近くのボランティアの受け入れを続けてきたが、ここまで無事故であることは、担当者の皆さんが高い意識を持ち、かつ担当者変更の際にも的確に引き継ぎをしてくれているからと考えている。また、交代した方も、我々と直接打ち合わせをし、さらには下見として公募日にボランティア参加をしてくださる方も多い。ただ、ちょっとした情報伝達ミスで大きな事故が起こることもあるので、受け入れる我々も含め気を引き締めていきたいと考えている。安全管理がとても重要なので、皆さんにも参加者の安全管理や意識（服装、飲み物や軍手の準備など）の面で引き続きご協力をお願いしたい。かつては、（フリスビーを持って・・・）短パン、サンダルで来た人などがいて、「今日は作業に加わらないでほしい」「お帰り下さい」と非常に厳しいことを言わねばならぬことが何度かあった。

この数年、我々との合意なく、実施日程を先に決めてしまっている事例が数件あって驚いた。また、名取事務所駐車場まで大型バスで直接乗り入れる事例もあり、出る際は困難を極め、テールランプを破損し、運転手に大きな迷惑をかけた。中型バスであれば侵入可能。我々も一層気を付ける。

【現場の作業内容について】

プロジェクトの経過とともに、作業内容は変わっていく。それに伴い、ボランティア募集時期にも変更が出てきている（別紙）。これまでは、ツルマメの抜き取りや、溝切り（排水路の修復・増設）がボランティア作業の多くを占めていた。クロマツが生長し、ツルマメは光を得られず、もう出てこないし、ほぼ抜き取りつくした。溝切りで早急に解決すべき多湿地帯は 2023 年 5 月に終えた。いまは、夏場の葛の刈り取りがメインの作業となっている。また、昨年冬から本数調整伐（間伐）も一部はボランティアの手で実施するようになり、間伐を行う冬の時期に公募ボランティアの日として実施している。来年度からは、メリハリをつけて夏と冬を作業集中月間とし、公募日の回数も減らすこととした。企業・団体受け入れも集中月に合わせる。

【ボランティアの受入目的について】

企業・労組側の「内部の目的」があることは非常に理解できるし、理解しようと努めている。共感できることがとても多い。皆様側の目的と我々の目的を理解し合うことが、お互いの成功と無事故に繋がると考えている。ただ、ボランティア派遣は大変ありがたいものの、組織の求心力を高めるためや、福利厚生的なイベントの受け皿ではないという点を改めてお伝えしたい。

ボランティアの受け入れは、オイスカそのものや、当プロジェクトをご支援くださっている皆さまに作業を通して活動への理解を深めていただきたいという気持ちで行っている。オイスカの世界各国での取り組みの手法や基本的な考え方の縮図、サンプルといえる当プロジェクトでオイスカ全体への理解、共感をしていただける企業・組合の皆さんと一緒に活動をしていきたい。

オイスカのオンラインイベントや、地球環境を考えるトークイベントなどの案内を社内告知していただいている組織が増えてきた。あらためて御礼をお伝えしたいと思っていた。一個人として名取に再訪してくださる方、イベントに来てくださる方が増えることが、わたしたちの励みとなっている。

■参加者からのご意見・質問

●CO₂の吸収固定などの環境面でもどのように貢献できているか共有いただきたい。

→今日は、専門家の方からその点も話していただくことになっている。マングローブほどではないとしても、ほかの樹木と比べ、クロマツは優位性があると言われている。ただ、その試算は、宮城県のコメントにあわせる必要も感じており、宮城県森林整備課を通じ県森林技術センターに問い合わせている。J クレジットの関係から、行政も無関心ではないと思っている。

●ボランティア時期や内容の変更をもう少し具体的に教えてもらいたい

→強い海岸防災林を育てるために最優先すべきことに取り組んでおり、溝切りも完全にやらなくてよくなったわけではなく、一部継続するが、クズ（植栽地の約 3 割に種子と根で侵入）やフジなどのツル性の植物や侵略的外来種ワースト 100 のニセアカシア（極一部に食い止めている）など、この現場にあってはならない植物を枯死させることが優先なので、これらの作業が中心になるということ。また、本来はプロの手で行っている冬の時期の本数調整伐も一部ボランティアで担うため、かつては行っていなかった冬の時期の受け入れも行うようになったという点。

●公募日を減らしているのはボランティアの枠・人数を減らすということ？

→これまで公募日に来てくださっていた地元のボランティアリピーターの皆さんは、公募日以外の受け入れの際に安全管理などを担うリーダーとして関わってくださるようになってきている。コロナ禍以後、組織での受け入れも再開・新規参加もあり、全体の数を減らすわけではない。ちなみにコロナ禍では、年間 300 人を下回るまで落ち込んだが、今期は年 1,200 人に十分回復した。

●プロの間伐の様子を動画で見たが、チェーンソーを使えないとボランティアに参加できない？

安全面で問題はない？

→ボランティアが活動する場合は手工具のみとし、電動工具を使用させていない。伐採ものこぎりを使う。参加者がチェーンソーや刈り払い機の取り扱いができる人であっても、ボランティアの際には使わないようにしている。間伐する木は小さく、2 人ペアで行う。ものこぎりで切るためゆっくりしか倒れない。しかし、昨年ボランティアリピーター対象に「指導者講習会」を 2 回行った。今後も各回、事前講習などで危険予知についてはしっかり伝える。

安全管理の点で最も気を付けなければならないのは、松葉が目に入らないようにすること。オイスカとしても保護シールド付きのヘルメットを用意するなどの対応をしている。

●クズの刈り取りが作業のメインになるということだが、これはどのくらい続くのか。いつまでオイスカが関わるのか？

→正確なところは見通せない。名取では植栽開始の 2014 年から執拗に続けているため他地区よりはるかに良い状態だが、それでも植栽地の 3 割に侵入。相当長く付き合わねばならないと考えている。昨年、年輪ができていたようなクズの根っこも発見され、完全に駆逐するのは難しい面もある。

また、行政への移管時期は当分先としか言えない。例えば当初の計画では間伐は行政に任せることになっていたが、実際にはオイスカが関わって取り組んでいる。その理由としては、植栽後の活着率が想定以上で、予定していた支出分をうまく積み立てられた（約 3 億円）ことに加え、今も継続的にご支援くださる方もいらっしゃるものがあげられる。ただ、その積立金は想定より 3 年後ろ倒しになったが、今年から取り崩しが始まった。いつかはその積立金も底をつく日が来る。2021 年以降も継続くださる寄付金と積立金だけで、森林組合に間伐を委託できなくなる日が来る。第 3 次 10 ヶ年計画（2031～2040）の間には、相当な森になっていると思うが、行政に完全移管するか、ボランティアでできる範囲で継続するかなど、仕事のやり方を変える時期はいつか来る。

参考まで、震災から 10 年の時点の総寄付額は 8.5 億円で、現時点では約 9.3 億円に増えたことも、積立金の取り崩し時期の後ろ倒し、つまりプロジェクトの追い風。本当に感謝しています。

●間伐したものを外に出す作業（搬出・処理）は大変だと思うが、それをボランティアで担うということはできる？

→それは不可能。今年は約 23ha・約 37,600 本（1 伐 2 残）を伐採する。搬出には大型トラック 106 台が動く計算。宮城県森林組合連合会の処理施設（大衡町）に運んでチップや牛糞と混ぜて堆肥にする。間伐した木の処理についてはオイスカと県が費用負担をしている。また、バイオマス発電に使用する計画も進行中で、その場合は「処理」のみ企業負担の方向。

■専門家からのレクチャー：赤木利行氏 「一ボランティアとして参加して」

1982 年林野庁入庁。2014～15 年に森林整備センター東北整備局（仙台）に出向していた際、「海岸林再生プロジェクト」の植樹行事に参加。吉田に対し「鬼軍曹」のイメージを抱いたものの、とりつかれたようにプロジェクトのボランティアに参加するようになり、16 年の転勤後も自宅（船橋）からボランティアに通っている。現在は日本造林協会（東京）の常務理事。

海岸林再生プロジェクトに参加して

赤木 利行

○ きっかけ

震災直後から海岸林再生には関心があった(震災時は大阪で勤務)
2014年～2015年に森林整備センター東北整備局(仙台)に勤務
2014年の植樹行事に参加

○ それ以降

2016年3月 転勤
それ以降も年に数回は自宅(船橋)から仙台に通う(夜行バス、ネットカフェ、温泉)

東日本大震災発災時には大阪に勤務しており、環状線に乗っていて揺れには気づかなかった。職場に戻ってテレビの映像で知った。千葉の自宅から夜行バス・ネットカフェを使って、解散後の東北の温泉も楽しみにしながら、海岸林のボランティアに参加を続けている。

<プロジェクトに関わってきた訳>

吉田さんはじめオイスカの人たち、地元のボランティアの方々とのつながりの中で、職場から離れた人間関係が心地よかったこと。雑事に追われていると無心になれる時間がなかなか取れないが、ツルマメをひたすらとるなど無心になれるのも心地よかった点。行政の仕事の中では、現場で体を動かす機会が少なかったことなどがあげられる。

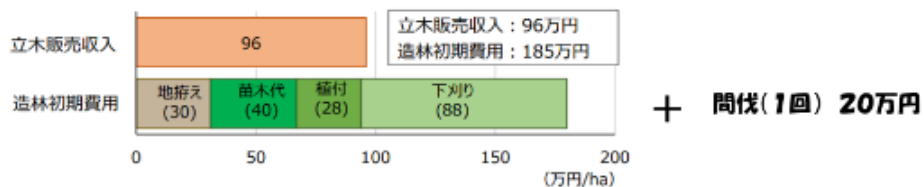
<私にとってボランティアとは>

プロが作業をするのに比べたら効率的ではない面があるが、そこにかかわることの価値のようなものがあるという点で必要だと思う。それは、自己満足でもいいし、何か人のためになっているという思いでもよくて、それが原動力になれば、ボランティアは自分のためにもなるのではないかと思う。役に立っているという自負のようなもの。また、普段は自分のために生きている中で、少しぐらい社会のためにという意識がある方が充実した人生になるのではないかと感じている。

海岸林再生プロジェクトに参加して

○ 少しでもお金の話

■ 立木販売収入と再造林費用



※林野庁業務資料（R2年標準単価より作成）スギ3000本/ha植栽、下刈5回
※立木販売収入はスギ山元立木価格にスギ10部級平均材積315m³/haを乗じて算出。

林野庁資料

**1haの森林を造成するのに200万円以上のお金がかかります。
たぶん、海岸林だともっとかかっているはずです。**

<お金のこと>

一般的に1haの森林造成（スギ）に200万円以上かかる。地植え、苗木代、植え付け、下刈りに185万円+間伐（1回20万円）。一方で立木販売収益は96万円。マツはもっとかかるはずなので、ボランティアの皆さんには、一部でも自分たちがボランティアでカバーしているという思いを持ってもらいたいのでは？

参考

木1本に固定されている炭素の量

- 森林による炭素吸収量を推定するためには、幹だけでなく、枝葉や根も含めたバイオマス（生物体総量）を推定する必要があります。また、幹材積*から幹の重量**を求めるためには容積密度（材比重）が必要になります。
- 森林総合研究所では、樹種ごとに、幹の重量と枝葉、根の重量の関係を調べ、拡大係数と地下部・地上部比として示しました。また、樹種ごとの標準的な容積密度を明らかにしました。

* 幹の材積は、現地調査のほか、航空写真などが整備している収獲表により把握することができます。

** ここでは重量とはすべて乾燥重量（＝バイオマス）です。バイオマス（炭素）は生物体総量を表すことがあるため区別しました。

例：35年生のスギ林で、平均的な木の胸高直径が20cm、平均樹高が18m、幹の材積が0.28m³の場合、



$$\text{炭素量} = (\text{材積}) \times (\text{①容積密度}) \times (\text{②拡大係数}) \times (1 + (\text{③地下部・地上部比})) \times (\text{④炭素含有率}(0.5))$$

この木に固定されている炭素量は、
 $0.28\text{m}^3 \times 314\text{kg/m}^3 \times 1.23 \times (1+0.25) \times 0.5 \approx 68\text{kg}$
となります。

バイオマス量を算出するために必要な係数の例

	拡大係数 20年生以下 以下	21年生以上 以上	地下部・ 地上部比	容積密度 (kg/m ³)
スギ	1.07	1.23	0.25	314
ヒノキ	1.05	1.24	0.26	407
アカマツ	1.63	1.23	0.26	451
カラマツ	1.00	1.15	0.29	404
トドマツ	1.88	1.38	0.21	318
エゾマツ	2.18	1.48	0.23	357
その他	1.40	1.40	0.40	423
クヌギ	1.38	1.32	0.28	688
ヤナギ	1.40	1.26	0.26	624
その他	1.03	1.33	0.26	646

出典：日本国森林炭素蓄積量推定マニュアル（2004.3）
（注）幹材積及び地上部・地下部の「その他」欄におけるそれぞれの値は、適用する地域により異なる。

※ 炭素量を二酸化炭素の重さに換算するには、上式に44/12(≒3.67)を乗じます。

(独)森林総合研究所 温暖化対応推進拠点



<炭素固定の話> 木1本に固定されている炭素量。幹、枝葉、根すべて含めて計算する式がある。
炭素量 = (材積…幹の部分) × (①容積密度) × (②拡大係数…枝葉) × (1 + (③地上部・地上部比…根)) × (④炭素含有率(0.5)) * 出典：森林総合研究所

これは木に固定される炭素量の計算式だが、排出量取引で使われるのは CO₂トンが単位となるため、ここに 44/12（12 分の 44≒3.67）をかけることで算出できる。

海岸林再生プロジェクトに参加して

仮に 直径10cm、7mのクロマツの炭素量は、クロマツを円錐と仮定すると、

炭素量＝(材積)×(①容積密度)×(②拡大係数)×(1+(③地下部・地上部比))×(④炭素含有率(0.5))

炭素量は1本当たり

$$0.05^2 \times 3.14 \times 7 \div 3 \times 451 \times 1.63 \times 1.26 \times 0.5 = 8.48(\text{kg})$$

仮に1haに500本のクロマツがあるとすると4240kgの炭素を固定している

ことになる。(※アカマツのデータを使用)

仮にJ-クレジットの取引価格を1t=CO₂ 1万円とすると

$$4.24 \times 44 \div 12 \times 1 \text{万円} = 15.5 \text{万円となる}$$

(おおざっぱではあるが、年間6m³/haずつ成長するとすると毎年ha当たり10万円ぐらいのクレジットが発生することになる)

<クロマツを円錐と仮定すると>

根本の直径が 10 cm、樹高 7 m と仮定。クロマツの係数がないので、アカマツで計算すると 8.48 kg の炭素量となる。J クレジットの取引単価を 1 トン＝1 万円と仮定すると仮に 1 ha あたりで 4, 24 トンとなり 15.5 万円となる。例えば年間 6 m³/ha ずつ成長すると、ha あたり 10 万円ぐらいのクレジットが発生することになる。(50 年で 300 m³の松林ができたと仮定)

■太田猛彦先生

(吉田より紹介)

東京大学名誉教授。森林、治山の「権威」として知られ、林野庁、国交省、環境省、東京都、埼玉県、静岡県などの各種審議会などの委員を歴任。ベストセラーの「森林飽和」(NHK 出版)は各種論文でも数多く引用され、重版を重ねている。2011 年、林野庁による「東日本大震災に係る海岸防災林の再生に関する検討会」の傍聴後、座長をしていた太田先生にご挨拶して以来、お世話になっており、オイスカ顧問にもご就任いただいている。

今日は近くで会合があったので、飛び入りで参加させてもらった。吉田さんから話のあった検討会では震災後の海岸防災林の再生をどのようにしようかと話し合いをし、林野庁が植栽基盤(盛土)を作り、その上に植えるという方針を決めた。その際に吉田さんと会って「海岸林再生プロジェクト」を知った。海岸防災林の再生には日本中の NPO、企業なども取り組んでいるが、オイスカはスケール(中身と技術、予算獲得の方法など)が全く違う。海外での 50 年以上の経験をもとに取り組んでいる。「海岸林再生プロジェクト」を見て、オイスカは海外でもこのようにプロジェクトを進めているの

だなぁと想像している。

お集まりの企業・団体の皆さんたちの継続的な支援についてはオイスカから聞いており、現場で汗を流して協力してくださっていることにも尊敬の念を抱いている。自分は現場でのクズ刈りのようなことはしていないので、皆さんのお話をうかがうことで自分も吸収できるものがあると思い参加した。文化的、社会的な課題解決のみならず森林、農業の分野でも貢献をするNGOも多いが、考え方、地道な取り組みの熱心さにおいてオイスカは素晴らしいものがある。それも皆さんが協力をしているからこそ素晴らしい事業になり、良い結果につながっているのだと思う。名取での活動についても、林野庁の治山事業でやっているものをオイスカの技術が先導している面もあり、素晴らしいと感じているし、私自身は土砂災害などが専門で、海岸の砂地や栄養も水もない過酷なところに森を戻していく研究をしてきたので、海岸林がまさに研究対象。オイスカにかかわることで自分自身が勉強になっているという思いを持っている。

■専門家・オイスカへの質問、コメントなど

●企業としては、寄附という形で事業を支援するだけではなく、Jクレジットのような形で炭素の売買などにつながると持続的でもあり魅力を感じる。

赤木) Jクレジットは、審査にもお金がかかるので、ある程度の面積がないとメリットが感じられないと思うが、宮城県内民有林全体、海岸林の民有林全体(750 ha)で考えれば、県としてJクレジットへの申請もあり得ると思う。

吉田) 宮城県としても県全体としてJクレジットに取り組みたいと考えている模様。しかし、申請、登録、審査まで時間を要する。また、資金獲得の話でいうと、企業版ふるさと納税でYahoo!から2年間寄附があり、そのお金が県を通じて本数調整伐で伐採した木の処理費用に使われている。

太田) 東京都は多摩産材の利活用の推進を進める中で植栽、間伐も含めてその活用に貢献した人を表彰をする制度を持っている。Jクレジットとは違うが、植える方も使うほうも貢献しているという視点もある中、「海岸林再生プロジェクト」でもさまざまな面で貢献をしていることはアピールできるのでは? 行政や国土緑化推進機構などで検証してもらおうといったことができないか? 温暖化防止への企業の取り組みは20年ほど前から始まっているが、生物多様性の保全への取り組みも企業に求められるようになったのはつい最近のこと。私たち人類は生態系の一部であり、生物多様性の保全をして、生態系サービスを成り立たせなければ生き残れないし、温暖化を防止して気候を安定化させなければ人類そのものが持続可能ではない。森林を保全することは、温暖化を防止することにも生物多様性の保全にもつながる。昔は山の人間だけが森に関わってきたが、今は都市の人たちも関わらなければならない流れができてきた。日本ではたまたま森林が豊かだったから林業が発展してきたけど、世界にはそうではない国もある。地球の上で考えると沙漠の人たちも、海洋の島しょ国の人たちも地球上の森を保全してくださいと声を上げる権利があり、実際にそれを要求してきているのが現実。二酸化炭素の問題だけではない切迫感を共有しなければならない。林業だけの問題ではない。森がある国は林業をやってもいいが、森を持続可能なものにして、温暖化防止などに傷がつくようなやり方であってはいけない。地球史の中で見た森に対する議論をする必要がある。

- 自組織では東日本大震災からの復興・創生への貢献を一番に考えてプロジェクトに参画している。その視点において防災林の役割をアピールしたいので、その機能がどの程度回復して、役割を果たしているのかというものがデータで示せたらありがたい。

吉田) 幅 200m のクロマツ海岸林があると海からの空中塩分の微粒子の 90%を漉し取ることや、樹高の 20~40 倍の面積が直接的な防風効果を受けることは繰り返し伝えてきた。

樹高も大きくなり、間伐も開始したことなどを受け、これまでの生長モニタリング調査を活かし、CO₂ の固定（後述に森林総研の計算式あり）などを新たに示す努力を、宮城県とも相談しながら始めてみたい。当プロジェクトに隣接する重塩害地域（波打ち際から 1 km）エリアの農地再開率、ビニールハウス棟数なども調べてみたい。ある程度増えたと思う。

数年前、村井知事とタイ政府職員から「雇用と交流人口による経済効果」を褒めていただいた。「経済効果」の算出や、市民の海岸林に対する意識調査、生物多様性調査（非常に高額のコスト）など知りたい気持ちはあるが、我々にはハードルが高い。

- 企業として支援を続けるためにはデータが欲しいというのはどこも同じ。社員にしっかり伝えていくことが大事だと思うので、今日はこうした情報にアクセスできてよかった。また、森林が温暖化防止と生物多様性保全の両方に関わっているということをあらためて整理して理解できたのでそうしたことも社員に伝えていく使命があると今日は感じた。

- 「海岸林再生プロジェクト」の場合、趣旨に賛同してピュアな気持ちで参加しているのが大前提にあるものの、時代や外部環境などが変わる中で炭素の吸収固定の話などが出てきているのだと思う。そうした中、オイスカとしても企業が取り組んでいるということを広報してもらえると、ステークホルダーにもアピールできるのでありがたい。カーボンオフセットにつながるとは思っていないが、定性的な部分もあるといいなあと思っており、例えば雇用創出（2022 年 3 月時点で 9,737 人）が経済効果として対外的にアピールできるようならありがたい。また、これまでのヒストリーについて資料共有があると、これまでのことを知らない若手社員にも訴求しやすい。

吉田) この会合で回覧している、初校段階の「生長モニタリング写真報告」も公開予定。

(※今春に印刷して、支援者・関係者にお届けすることとします)

林野庁が、2013~2018 年の生物多様性調査を、当プロジェクトの現場で実施した。樹木・草本約 270 種、昆虫約 270 種、鳥類約 50 種・・・など東北森林管理局の HP で公開されており、当プロジェクト HP からリンクさせていただいている。

鳥類に関しては、地元ボランティアに日本野鳥の会の方がいて、昨年からの毎月の調査と当プロジェクト HP での紹介を開始した。今年も春までに報告できる。HP ブログでは「いきもの」のカテゴリーを設定している。(※1 月 22 日のブログで「フクロウ」を紹介した)

- ボランティア参加時に地元の方もいて、遠方からの参加者もいていろいろな人が集まる場なのだと感じた。中には専門家、知見がある方もいて自然発生的にリーダー的な人が出てきたりして、人がつながっていく感じが「また行きたい」と思う要因かもしれない。現場で吉田さんから動植物のことを教えてもらった。種の復興も意識しているということを感じたので、引き続きそうした発信もお願いしたい。

●企業からの呼びかけでボランティアに参加した人の中にも、個人的に参加する人がいると思う。

(1月27日の公募日は、ニコン、三菱UFJニコス、ANA労組、東北電力労組、東レ労組の元出身、もしくは現職の方が8名)ボランティアに参加してよかったという思いを共有できたら輪がさらに広がっていくのではないかと思います。

●成果を目に見える形で公表していくことはとても重要なことだと思う。また、さまざまな企業・労組が一緒になって取り組んでいることを示すような場があることを期待している。

太田) 成果の見える化はとても重要で、今の時点でどのように森に関わることが有効なのかを整理して皆さんにも役立ててもらうことが必要だし、オイスカにはそれをする力があると思う。

また、今日ご参加の企業さんで3人でも5人でも集まる機会があれば、必要なレクチャーなど可能です。ご希望があればご相談ください。

吉田) そもそも今日のこの会合は、企業団体同士にとっても「横でもつながっている」ことがお互いに望ましいと想像し、コロナ禍を除き毎年開催を続けていて、数年ぶりの開催となった。今日は少人数になってしまったのが残念だったが、この時期になってしまったのは私たちの都合。本来は11月~12月初旬に開催したかった。「成果の見える化」「さまざまな企業・労組が一緒になって取り組んでいることを示すような場」、そのような広報が来年度以降の課題の一つと考えている。今日の情報交換を大いに参考にして今後取り組みたい。ありがとうございました。

●事務連絡(浅野)

1. 1月27日(日)11時~12時 現場からの生中継オンラインイベント「今どうなってる? 名取の海岸林」を開催します。ぜひご参加ください。
2. 書籍「松がつなぐあした」(著: 小林省太元日本経済新聞論説委員)が重版となった。今春に直近の状況が加筆されて販売開始となります。

以 上